HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『伊勢物語』誤写の論 : 第十四段の場合
Author(s)	後藤, 康文
Citation	国語国文研究, 105, 1-9
Issue Date	1997-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94771
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_105_01-09.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『伊勢物語』誤写の論
――第十四段の場合――

後藤康文

一

陸奥の純朴な娘は、瞬時にして漂泊の貴公子の恋の虜となった。その顚末を語るのが、『伊勢物語』（天福本）第十四段だ。

むかしおとこみちのくにゝすゝろにゆきいたりにけりそこなる女京のひとはめつらかにやおほえけんせちにおもへる心なんありけるさてかの女

　中〳〵に恋にしなすはくはこにそなるへかりけるたまのをはかり

うたさへそひなひたりけるさすかにあはれとやおもひけんいきてねにけり夜ふかくいてにけれは女

　夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる

といへるにおとこ京へなんまかるとて

くりはらのあれはの松の人ならはみやこのつとにいさといはましを

といへりけれはよろこほひておもひけらしとそいひをりける

（学習院大学蔵本・一四ウ～一五オ）

本稿の意図は、この章段における傍線部本文「なて」が「なん」の誤写以外のなにものでもないことを、今さらながら主張することにある。というのも、同章段の男の歌の第二句「あれはの松」については、陸奥の歌枕「あねは（＝姉歯）の松」の誤りであることがつとに衆目の認めるところであるのにひきかえ、ふたつめの女の歌の第二句「きつにはめなて」が「きつにはめなん」からの転訛であるとする考え方は、今日にいたってもなお正当な市民権を得ているとはいいがたい状況に置かれているからだ。

ちなみに、近・現代の『伊勢物語』諸注[1]のうち、問題の「なて」をそのままに解読しようとするものの立場は、およそ次のふたつに別れるとみてよい。そのひとつは、

○「はめなで」ならば、はめなでやむべきかの意に解すべきである。即ち食ませずに置かうか、必ず食ませてやるの意。
（『大成』・語釈）

○「はめなで」の「な」は完了の「ぬ」。否定ではない。「はめで」を気分的に緊張させているのだ。意味は「はめないで」だが、否定は「な」にあるのではない。「はめなでやはあらむ」のことで、それを「で」で強く切ったのだ。ここに休止がある。
（『ノート編』）

○水槽にぶち込まずにおくものか。
（『集成』・頭注）

○「はめなで」は「はめなむ」の誤りで「入れてやろう」の意とする説と、「はめなでおくべきや」の略で「入れないでおくものか」という強い意志表現であるとする説とがみられるが、後者をとる。
（『全訳注』・語釈）

○わたしは、きつ＝水槽説をとるが、「なで」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、打消の接続助詞の「で」がつき、「水槽にはめないで」の意の下に「おくものか」という気分が略されたものとみているのである。歌の調べ自体が、女の怒っている口調であるから、息が詰まった形で、「はめなで」の下が表記に表われなかったとしても不自然ではなかろう。
（『講説』）

のごとく、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋打消の接続助詞「で」＝「なで」の下に「おくものか」の意を補充する、いわば〈省略説〉。

そして、もうひとつは、

○「なで」は、「なむ」の意と取れるが、他に例のない助動詞。方言であろう。
（『評釈』・語釈）

○難解の句であるが、なではなむの方言とみる。でを打消にとると全く解釈できない。長野県の方言に、行かむとすの意の行かずがあるが、そのずに関係する語として解する。
（狩野尾・中田『新解』・語釈）

○「て」は「ん」の誤写とする可能性も大きいが、これも奥羽地方の方言と解しておく。
（『鑑賞』）

○「はめなで」は、「きつ」を狐とする説ともあいまって諸説がある。「嵌め」に完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」がつき、さらに打消の「で」のついたものとする説が多いが、問題の残るところである。むしろ、全体の歌意から見て、「嵌めなむ」の意の方言と解したい。
（『角川文庫』・補注）

というように、「なで」を完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋意志の助動詞「む」の終止形＝「なむ」の東国方言と解く、いわば〈方言説〉である。

が、これらの説がふたつながら問題にならない謬説であることは、あまりにも明白だろう。はじめの〈省略説〉についていえば、完了の助動詞「ぬ」の未然形＋打消の接続助詞「で」＝「なで」は、

・みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく来る
（『古今集』恋三―六二三・小野小町／『伊勢物語』第二十五段）

・みもはてず空に消えなでかぎりなく厭ふ憂き世に身の帰り来る
（西本願寺本『伊勢集』八）

・かひもなき草の枕に置く露の何に消えなで落ちとまりけむ
（『後撰集』雑四―一二八五・よみ人しらず）

・憂しとてもかつも消えなでふるほどにわが身は雪におとらざりけり　（『元真集』二七八）

・憂き世にはゆき隠れなでかき曇りふるは思ひのほかにもあるかな　（『拾遺集』雑上―五〇四・清原元輔／『元輔集』一一四）

などの例からも知られるとおり、「（本来ならば～すべきであるのに、実際には）～してしまわまいで」といった意味にしか解しえないことばであって、その下に「おくものか」等の〈省略〉を許容する用法など、常識ではとうてい考えられない。万一そうした奇妙な用法が「なで」に認められるのであれば、裏づけとなる用例の提示があってしかるべきところだが、もとよりその確証は、どこにも示されてはいないのだ。

また、一方の〈方言説〉に関しても、根拠のきわめて薄弱な苦しまぎれの憶説としか評せない。あれこれと述べたてるまでもなく、つとに賀茂真淵の『伊勢物語古意』[2]が、

○万葉にあづま哥多かれど「はめなん」を「はめなて」てふ如くいへるはなし。あづま人とても五十の音の外に出たる言語はなき也。

と指摘する、その点だけからも〈方言説〉の安易さは容易にみすかせるのではあるまいか。当時の東国において「なん」と同義の「なで」が一般的用語として通用していたのであれば、当然『万葉集』巻第十四に収められた多数の「東歌」の中に一例なりともその用例が見出だせてよいはずだ。ところが、実際には、

・伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎ奈牟ものを乱れしめめや　（三三六〇）

・筑波嶺にかか鳴く鷲の音のみをかなきわたり南牟逢ふとはなしに　（三三九〇）

・信濃路は今の墾道刈株に足踏ましな牟履はけわが背　（三三九九）

・かの児ろと寝ずやなり奈牟はだ薄宇良野の山に月片寄るも　（三五六五）

と、東歌においても「なん」はあくまで「なん」であって、これを「なで」と表記した例は皆無なのである。

このとおり、今日までなぜかその命脈を保ってきた〈省略説〉および〈方言説〉は、いずれも聴くに値しない妄説であって、今後いっさい顧みられるべきではない。それは同時に、現本文「なて」を「なん」の〈誤写〉であると認めない以上、正解への道は永遠に拓けてこないことを意味しているのである。

二

女の歌の「きつにはめなて」は「きつにはめなん」の〈誤写〉である、と考えなければならない。そして、その根拠はふたつほどある。ひとつは歌の表現形式としての類型の存在であり、もうひとつは「ん（无）」から「て（天）」へという本文転訛の、和歌における実例の存在である。

まずは、ひとつめの根拠であるが、そもそも問題の箇所を含む「夜も明けば」の一首は、『伊勢物語』所載歌を例にとると、

・思ひあらば葎の宿に寝もしなむひしきものには袖をしつつも

（第三段／『大和物語』第百六十一段）

・名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

（第九段／『古今集』羇旅―四一一・在原業平）

・野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ

（第百二十三段／『古今集』雑下―九七二・よみ人しらず）

などの歌と、上句中の〜仮定の接続助詞「ば」〜（完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋）推量・意志の助動詞「む（ん）」〉の形式が共通する点で、巨視的にみて同じパターンを踏襲しているものと判断されるわけである。このレヴェルでの〈類型〉を同時代の和歌の中からいくつか拾い出してみるなら、たとえば、

・五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや

（『古今集』夏―一三八・伊勢）

・道知らば尋ねも行かむもみじ葉を幣と手向けて秋は去にけり

（同秋下―三一三・凡河内躬恒）

・道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草

（同墨滅歌―一一一一・紀貫之）

・春雨の降らば野山にまじりなむ梅の花笠ありといふなり

（『後撰集』春上―三二・よみ人しらず）

といった例を容易に追加することができるし、また、よりいっそう近似した〈類型〉となれば、後代の作ばかりではあるけれども、

・夜も明けばあしたの原に立ち出でて雪の消え間に若菜摘みてむ

（『源賢法眼集』六）

・春の夜の明けばとく見むつれづれと桜もよほす雨の降るかな

（『嘉言集』一一一）

・夜だに明けば尋ねて聞かむ時鳥信太の森の方に鳴くなり

（『後拾遺集』夏―一八九・能因法師）

・夜も明けば人やとがめむ時鳥身にしむばかり鳴きわたるかな

（『範永集』一三五）

のごとき諸詠、さらには、

・明けばまづ尋ねに行かむ山桜これば かりだに人におくれで

（『後拾遺集』春上―八三・橘元任）

・明けはてば野辺をまづ見む花薄招くけしきは秋に変はらじ

（同秋下―三七三・藤原範永／『範永集』四）

・明けばまづ散らさで折らむ時鳥花橘の枝に鳴くなり

（『散木奇歌集』二二〇）

・明けばまづ人に語らむ時鳥夜深く宿を鳴きて過ぐなり

（『万代集』五八二・藤原通俊）

・明けはてば起きてまづ見む木枯しに木々のこずゑの紅葉散るなり

（同一三四八・藤原伊家）

・明けばまづ人に語らむ時鳥まだ里馴れぬ初音聞きつと

（『雅兼集』二一）

・明けばとく返し直さむ小夜衣見て心ゆる人もこそあれ

（龍門文庫本『頼政集』三四四）

等々の例を見出だすことができる。畢竟、当面の女の歌の初二句も「夜が明けたならば、きっと〈きつにはめ〉てしまおう」の意であること疑うべくもなく、これら数々の歌によってかたちづくられた〈類型〉のひとつとみなすのが至当と考えられるのである。

ついで、ふたつめの根拠。いくら述べたような〈類型〉の存在を盾にとってみたところで、実際の書写のレヴェルにおいて、草仮名の「ん（无）」が「て（天）」に誤られる可能性が認められなければ話になるまい。だが、幸いなことに「无」と「天」の草体はきわめて紛れやすく、このケースは逆の場合も含めて、われわれが日常しばしば遭遇するありふれた〈誤写〉のパターンだといえるのである。ここではその実例を、八代集所収の歌の中からふたつだけ選んで紹介しておくことにしよう。

そのひとつは、『古今集』巻第十九・雑体の小野小町の歌（一〇三〇）で、今日一般的な定家本系本文が、

人にあはむ月のなきには思をきてむねはしり火に心やけをり
（冷泉家時雨亭文庫蔵貞応二年本[3]）

あるいは、

人にあはん月のなきには思をきてむねはしり火に心やけをり
（梅沢彦太郎蔵貞応二年本[4]）

であり、他系統の諸本においても、

・ひとにあはんつきのなきよはおもひおきてむねはしりひにこゝろやけをり
（伝後醍醐天皇宸翰志香須賀本[5]）
・人にあはん月のなきよはおもひおきてむねはしりひに心やけをり
（伝藤原為家筆雅俗山庄本）
・ひとにあはんつきのなきよは思おきてむねはしりひにこゝろやけをり
（藤原雅経筆西脇家本）

などとあるのに対して、現存最古の完本たる元永本[6]では、

人にあはてつきなき時はおもひおきてむねはしり火に心やきをり

となっている。同歌の初句は元永本のごとく「人に逢はで」ではいかにも不都合であり、この箇所にかぎっていえば、「む」→「ん」→「て」の転訛過程を想定するのが妥当なところだろう。

いまひとつは、『千載集』巻第十二・恋二の藤原顕輔の歌（七三一）で、最近の『新日本古典大系』本（片野達郎・松野陽一校注）や『和泉古典叢書』本（上條彰次校注）が底本に採用した龍門文庫本[7]では、

いまはさはあひみてまてはかたくともいのちとならんことのはもかな
というかたちであるに対し、ほかの諸本においては、
いまはさはあひみむまてはかたくとも命とならむことのはもかな
（陽明文庫本[8]）

あるいは、

今はさはあひみんまてはかたくともいのちとならんことのはもかな
（八代集抄本[9]）

などとなっている。この歌の場合も第二句は「逢ひ見て」ではなく「逢ひ見む（ん）」とあるのが正しく、やはり「む」→「ん」→「て」の誤写が考えられるのである。

以上、〈誤写説〉の根拠を二点ほど提示して、それぞれの説明に努めた。「きつにはめなて」の「なて」が「なん」からの転訛であることは、もはや火を見るよりも明らかではなかろうか。

三

にもかかわらず、というべきか、どこまでも「なて」の本文に執着して、問題の円満な解決を図ろうと試みる殊勝な立場もある。いうまでもなく、先に却下した〈省略説〉とも〈方言説〉とも異なる見地に立脚して、である。それらの非を明確にしておくことは、〈誤写説〉の正しさを皮肉にも補強する結果につながると思われるので、ここでしばらく、管見に及んだその種の論稿二篇を俎上にのせて批判を加えておくことにしよう。

はじめに、竹岡正夫「伊勢物語難語考四題――第三・一四・一八・二三段――」(『川瀬博士古稀記念・国語国文学論文集』雄松堂書店、昭五四)。同論文は、「なて」を分析して、まず「な」を、

・熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出で菜

(『万葉集』巻第一―八)

・生ける者つひにも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあら名

(同巻第三―三四九)

などと同じく、上代に用いられた願望の終助詞であるとし、残る「て」については、

・忘らむ弖野行き山行きわれ来れどわが父母は忘れせのかも

(『万葉集』巻第二十―四三四四・商長首麿)

・父母が頭かき撫で幸くあれ弖いひしけとばぜ忘れかねつる

(同―四三四六・丈部稲麿)

といった防人歌の「て」と同様のもので、「助詞「と」の東国方言と解し得る」と結論する。ちなみに、この考え方は、竹岡氏の遺著『全評釈』においても「誤字説は論外」との認識のもとにそのまま踏襲され、「きつにはめなて」の部分には「狐に食わせてやろうっと〔水桶に突っこんでやろうっと〕」という訳が付されている。

しかし、これがとうてい承認しうる説でないことは誰の目にも明らかだろう。そもそも竹岡論文は、「な」と「て」とをバラバラに推し当ててこと足れりとしており、それらが実際に組み合わさった「なて」に関しては何の説明もなければ例示もないのだから、その段階ですでに問題にならないわけだ。が、それでもあえてついてみるならば、願望の終助詞「な」は活用がないだけで語義上意志の助動詞「む」とほとんど等価であり、かつ、防人歌にみえる「て」は引用の格助詞「と」の訛ったかたちにほかならないのであるから、『伊勢物語』第十四段の二首目の歌は、理論上、

夜も明けばきつにはめむとくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

に等しいと理解せざるをえなくなる。けれども、これでは、「くたかけ」の方が何かを「夜も明けばきつにはめ」ようと思って、そのために「まだきに鳴きてせなをや」ったという、まったくもって支離滅裂な歌となってしまい、万事休すである。

その点、近藤明「伊勢物語第十四段「きつにはめなで」考――「なで」を中心に――」(「解釈」第三十七巻第八号、平三・八)のアプローチは正攻法だ。すなわちこの論文は、素直に「「なで」を「完了の助動詞ヌ＋否定の接続助詞デと見」たうえで、「否定の接続助詞と言われるデが、意味上肯定的な含みを持った文脈で用いられる場合があ」

り、「特に本歌のようにバによる仮定条件句を前に伴って「仮定バ…デ」という構文を取る場合にこの傾向が顕著である」点を重視して、いわば正面突破を試みようとしたもの。すでに述べたとおり、この種の「なで」は「〈本来～すべきであるのに、実際には〉～してしまわないで」ほどの意を表す。近藤論文のいう「肯定的な含み」とは、このうち丸括弧内に収めた言外のニュアンス＝「…べきなのに」「…したらよいのに」に相当する語句」を指しており、たとえば、『新古今集』巻第十五・恋五の馬内侍の作（一三九五）、

つらからば恋しきことは忘れなでそへてはなどかしづ心なき

（『馬内侍集』九八）

が、その第二句と第三句との間に「忘れてしまいそうなものなのに・忘れてしまいたいのに」といった「肯定的含み」を補って解釈されるべきであるのと同じ理屈が、当面の「夜も明けば」歌についても当てはまるという。しかし、このような論理がまったく不当なものであることは、その結果として導き出された一首の解釈じたいが如実に物語っている。つまり、同論に示された「夜も明けば」歌の訳文は、

夜が明けたらば〈「きつにはめ」て、鳴かないようにしてしまおうと思ったのに〉まだ「きつにはめ」てしまわないでいるうちに、夜明け前に鶏の奴が鳴いて、あの人を帰してしまったよ

と、このとおりなのだが、こうした解釈がいかに不可解千万なものであるかは、細かな難点をあげつらうまでもなく、一目瞭然ではなかろうか。何よりも、鶏は夜明けを告げる鳥である。にもかかわらず、「くたかけ」が「まだきに鳴」くのを防ぐために夜が明けてからやおら「きつにはめ」るつもりであったとすれば、それはあまりにも間が抜けた話だ。かりに事態を予測できたのであれば、女は「くたかけ」を、遅くともその夜のうちに「きつにはめ」て、鳴かないようにして」おくべきであった。

以上、ふたつの論文をあえて批判することで、「なて」の奇っ怪さはますます鮮明になったはずだ。どう足掻いてみても説明のつかない不審本文に、もうこれ以上惑わされていてはならない。しょせん、「なて」は「なん」の〈誤写〉でしかないのだから。

四

江戸時代の注釈書でいえば、はやく『伊勢物語童子問』[10]が、

もし「なん」といふ草字「なて」とあやまりたる歟。物語の哥は「なて」にはあるべからず。「はめなん」成べし。其証は真名伊勢物語に「四方開者木豆尓為食久宅鶏未尓鳴而背乎所遣」とあれば、哥は「はません」「くはせん」にて有べし。

という疑義を呈していたほか、『伊勢物語古意』は、

「はめなん」は古本に「為食」と書たるにてしらる。今本に「はめなて」と有は「はめなん」の「ん」を「て」にあやまりし物也。

として、また、『伊勢物語新釈』[11]も、

「はめなん」真本にしたがふ。「はめなて」は「ん」を「て」にかきあやまれるなるべし。「はめなん」とかける古写本もありと信友いひおこせき。さるを臆断に「消はきえなで」と同じ事に

とけるはたがへり。さやうならば此哥宵のまにきつよ、はみなで、とあるべき也。

と述べて、ともに本文を改めていた。

また、近代の研究に目を移してみると、たとえば、柿本奨「解釈断章」（「平安文学研究」第五十一輯、昭四八・一二）が、「伊勢物語の本にも誤写があつた」としたうえで、焦点の「なて」について次のように主張していた。

「て」は「ん」の誤写で、「なて」は「なん」と改めるべきではなかろうか。この誤写は、たとえば蜻蛉日記の宮内庁本には数例見えて、「て」とあるべきが「ん」に転訛したもの一例、逆に「ん」とあるべきが「て」に転訛したもの二例数える。同じ趣の転訛と見なしてよいものに、「む」とあるべきが「て」に転訛したもの二例、「て」とあるべきが「も」に転訛したもの三例、その逆に「も」とあるべきが「て」に転訛したもの二十三例がある。例の多い誤写である。そうした誤写がここにも見えるのではなかろうか。

こうした〈誤写説〉の定説化を阻んできた原因は、ひとえに確たる「証拠」がない、すなわちそのような本文を有する伝本が現存しない、という点にあった、いな、という点にしかなかったといってよかろう。そして、その点こそが例の「あれはの松」との決定的な相違であったのだ。だが、ことここに至って、それが何ほどの障碍となりえようか。今や現行の本文「なて」を保存しつつ、

○「で」は東国の方言で「む」の意という説があるが、この歌は東歌を採集したと思われるふしもなく、また東歌らしく見せかけたという意図も見えないから、方言説には従わないで、「む」の誤写とみておく。なお「なで」をそのまま解釈し、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に打消の助詞「で」をつづけたもので、「……してしまわないで」とする説があるが、それでは一首がまとまらないから従わない。（西下『新解』・語釈）

○「きつにはめなで」は「きつにはめなむ」の誤写であろう。（森本『全釈』・語釈）

といった注を施す次元で足踏みしていてはならない。「きつにはめなて」から「きつにはめなん（む）」への本文改訂を敢然と実行に移し、そのうえで、「きつ」＝〈狐説〉に立つ者は「狐に食わせてしまおう」の意に、また、〈水槽説〉を支持する者は「水桶にぶち込んでしまおう」の意に、それぞれ解釈しなければならない時が来ているのである。

注

（1）本稿で引用する近・現代の注釈書とその略称は以下のとおり。新井無二郎『評釈伊勢物語大成』（代々木書店、昭六）→『大成』、窪田空穂『伊勢物語評釈』（東京堂出版、昭三〇）→『評釈』、西下経一『伊勢物語新解』（明治書院、昭三三）→西下『新解』、『折口信夫全集・ノート編第十三巻』（中央公論社、昭四五）→『ノート編』、狩野尾義衛・中田武司『伊勢物語新解』（白帝社、昭四六）→狩野尾・中田『新解』、森本茂『伊勢物語全釈』（大学堂書店、昭四八）→森本『全釈』、片桐洋

一『鑑賞日本古典文学・伊勢物語』（角川書店、昭五〇）→『鑑賞』、渡辺実『新潮日本古典集成・伊勢物語』（新潮社、昭五一）→『集成』、阿部俊子『講談社学術文庫・伊勢物語全訳注』（講談社、昭五四）→『全訳注』、石田穣二『角川文庫・新版伊勢物語』（角川書店、昭五四）→『角川文庫』、由良琢郎『伊勢物語講説・上巻』（明治書院、昭六〇）→『講説』、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、昭六二）→『全評釈』。

（2）引用は、北海道大学附属図書館蔵寛政五年版本に基づく。

（3）引用は、『冷泉家時雨亭叢書』第二巻（朝日新聞社、平六）所収の複製に拠る。

（4）引用は、西下経一・滝澤貞夫『古今集校本』（明治書院、昭五二）底本の翻刻に拠る。

（5）以下三本の引用は、すべて久曾神昇『古今和歌集成立論・資料編』全三冊（風間書房、昭三五）所収の翻刻に拠る。

（6）引用は、『日本名筆選』33（二玄社、平七）の複製に拠る。

（7）引用は、『龍門文庫善本叢刊』第一巻（勉誠社、昭六〇）の複製に拠る。

（8）引用は、『陽明叢書国書篇』第三輯（思文閣、昭五一）所収の複製に拠る。

（9）引用は、『北村季吟古註釈集成』36（新典社、昭五五）の複製に拠る。

（10）引用は、『全評釈』所収の天理図書館蔵本翻刻に基づく。

（11）引用は、『全評釈』所収の文政元年版本翻刻に基づく。

（ごとう　やすふみ・北大助教授）